大学文書館へ行こう

第11回 桑園の大学村

北海道大学大学文書館　井上　高聡

大学村の田中義麿宅
（1913年ころ、大学文書館蔵）

大学村の人びと

現在の札幌市中央区北六～七条十二～十三丁目の住宅地は、かつて「大学村」または「博士町」などと呼ばれていました。北大教授が私宅を構えていたためです。

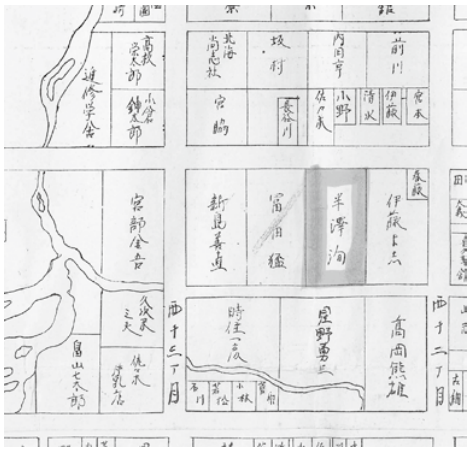
元は大学の農場敷地であったこの場所に、一九〇九年十二月に東北帝国大学農科大学助教授時任一彦（一八七一～一九五七年、農業物理学、後に農学部長）が居を定めたのが、大学村の始まりです。数年の内に、高岡熊雄教授（一八七一～一九六一年、農業経済学、後に第三代北大総長）、新島善直教授（一八七一～一九四三年、林学）、和田健三講師（一八六〇～一九三四年、水産学、元教授）、田中義麿助教授（一八八四～一九七二年、遺伝学、後に九州帝国大学教授）、半澤洵助教授（一八七九～一九七二年、応用菌学、後に教授）が家を構え、少し遅れて星野勇三教授（一八七五～一九六四年、園芸学、後に農学部長）、宮脇富助教授（一八八三～一九六三年、畜産学、後に帯広畜産大学長）、宮部金吾教授（一八六〇～一九五一年、植物学）などが加わります。以降も北大関係者や、医師、中学校長、銀行頭取など、いわゆる名士たちが居住する住宅街を形成しました。池上重康先生（工学研究院）の調査によると、一九五〇年代半ばまでに北大関係者延べ十七名が住んでいます。

ハイソで寛雅な村会

この大学村には「村会」なる集いがあり、各家当主が、月に一度、各家を持ち回りの会場として、近隣の問題を協議し、懇談に興じました。第一回は、一九二一年十二月、時任邸で開いています。出席者は先述の高岡、新島、和田、田中に加え、奥村医師（未詳）の計六名です。

近隣の問題として、電灯設備、消火器備え付け、郵便局の設置などを協議しています。また、名士の住宅街であっただけに各所から寄付の依頼などが多く、火防組合、神社祭礼、山車費用、小学校の創立記念、消防ポンプ購入、記念碑建立などについて、村会で一致した金額を取り決めています。さらに住宅地は大学の所有地であるため、土地払い下げや地代についても協議しています。東京の沢庵や千葉の醤油の共同購入、道路の除雪費用も議題に上がっています。

一方、茶菓を用意した懇親でもありました。転出入者の歓送迎会を開き、観菊会、クリスマス会、月見を催し、時任お手植えの薔薇の観賞、星野の台湾土産のパパイヤ試食、宮脇の洋行土産の活動写真映写なども楽しんでいます。ラジオ番組を一緒に興じることもありました。一九三八年十二月二日（第二四九回）には原智恵子のピアノ演奏を鑑賞しています。原は前年にショパン国際コンクールに出場し話題になりました。一九四三年二月二十八日（第二九二回）には、四代目柳家小さんの落語「うどんや」を聞いています。一九四八年八月九日（第三四五回）には「ご名答」が流行語となったクイズ番組「二十の扉」を楽しんでいます。



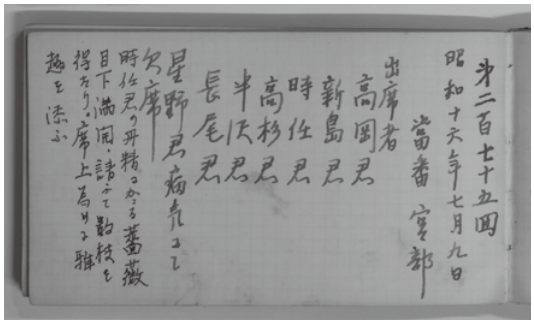
1932年の大学村の住宅図（大学文書館蔵）

往時をたどる公園と日誌

戦後、高倉新一郎教授（一九〇二～一九九〇年、農業経済学、後に経済学部長）が村会に加わります。また、一九五一年三月十六日には村会の精神的支柱でもあった宮部金吾が九〇歳で逝去します。宮部邸跡地は現在、「宮部記念緑地」（北六西十三）として公園になっています。

一九六七年十一月三日（第四七六回）、二年二ヶ月ぶりに村会を開き、子の世代を含めた集まりとして継続していくことを決めます。このときの出席者九名の内、戦前から加入していた親世代は半澤洵のみです。これ以降は夫人中心の集いとなることも多かったようです。そして半澤も一九七二年九月二十五日に九三歳で長逝します。最後の村会は一九九七年十月二十一日（第五九六回）です。子の世代も八〇歳代、九〇歳代になり、孫世代も出席していました。

村会には喧噪な俗世から遠のいた寛いだ趣があります。メンバーの長寿はそのためでしょうか。八五年間の村会の記録「村会日誌」五冊は、二〇〇七年九月、半澤家から寄贈いただき、大学文書館が所蔵しています。往時の大学教授の暮らし振りを垣間見ることができます。


第二百七十五回
昭和十六年七月九日
當番　宮部
出席者
高岡君
新島君
時任君
高杉君
半沢君
長尾君
欠席者
星野君病氣ニテ
時任君の丹精なる薔薇
目下満開、諸方で勘校を
得たり、席上為りて雅
趣を添ふ

「村会日誌」1941年7月9日（第275回）の記載（大学文書館蔵）